め詩人たちは無意識の内に、自立を禁じるサディスティックな神を創り出したのである。

リタ・バセは、自分自身の物語、感情、欲求に誠実なミラーの思想に影響を受けた現代スイスの神学者である。バセは、西洋キリスト教社会で怒りが抑圧される傾向にある事実を指摘する。墓碑に一般的に次の一節が選択されることに、バセは驚きを隠せない。「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」(ヨブ記一・二二)。これは自分の子供全員を亡くしたヨブが発した言葉である。この言葉の裏には、自己自身の怒りを正当なものだと認めることへの恐れが存在している。「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」(一・八)人間の内で、湧き上がる怒りは〈不当な〉ものとして検閲され、無意識に抑圧される。行き場のない人間の怒りは、神の怒りへとすり替えられ、偽装されて再び表面化する。つまり、検閲され押さえつけられた怒りが、人間の内で〈罰せずにはいられない神〉・〈無意味に残忍な神〉という戯画化された神観を形成するのである。

「見よ、わたしは訴えを述べる。わたしは知っている、わたしが正しいのだ」(ヨブ記二三・一八)。ヨブは遂に、自らの怒りを正当なものとして受け入れるに至る。怒りの自己検閲を脱したヨブが自覚し得た事実を、バセはこう理解する。「私の生命よりも重要なものがある。それは、私の語る権利、つまり、私の真実への権利、私の正義を要求する権利である」(『聖なる怒り』九一頁)。私の手で「私であること」を殺してしまう、「私の真実」を私の内で窒息させるより、生命を賭けてでも他

者の前で表明しようとする決意の怒り、それがバセの「聖なる怒り (sainte colère)」に他ならない。聖なる怒りが真実を語ろうと決意するのは、他の誰にもそれができないからである。だが、「私の」真実は、全能ではありえない。「偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです」(エフェソ四・二五)。「互いに体の一部」であることは、自己の限界の受容だけでなく、各人の真実が取り替え不可能なものだと確信をも前提としている。さらに、聖なる怒りは、新たな暴力によって暴力を終わらせる幻想とも無縁である。「怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままではいけません」(四・二六)。怒りの命令は、「罪」・関係の破綻を回避するために必要不可欠であり、関係の内に再び身を投じたいと願うゆえの怒りを、永久に無意識の夜に飲み込ませないというのが、この箇所の意味なのである。つまり、聖なる怒りは、他者との関係を回復させるために、まさに発せられるのである。

レヴィナスにおける言語と他性

重松 健人

レヴィナスは、ことばは思考と不可分なものだと考える。ただし、ことばとはそもそも私だけではなく、他者のものでもある。言語 (langage) とは根源的に他者との関わりのことであり、他性をはらむものなのだ。このような言語における他性の

問題は、ウイトゲンシュタインにおいても考察されていよう。表面的には、ウイトゲンシュタインの独我論は他者の排除を表現しているようにもみえるが、その背後で他性が蠢いている。日常の言語活動において、私は原理的に知り得ない他者の心的事象をことばにおいて理解するよう求められる。その不可能な要求への反駁こそ、ウイトゲンシュタインの言語思想の通底音である。現実の言語の曖昧さに明らかなように、ことばの一義性は保証されるものでは決していない。また他者の「言いたいこと」を私が直観することもできない。それゆえに、いわゆる後期ウイトゲンシュタイン思想は、ことばの理解における心的過程を考察から排除し、もっぱらことばの使用に焦点を絞る言語規則に習熟することを求める議論を展開する。こうして、ウイトゲンシュタインは言語における他性を抹消しようとする。

これに対しレヴィナスは、ウイトゲンシュタインとは異なる仕方では言語にアプローチする。レヴィナスはウイトゲンシュタイン同様、ことばを一義的ならざるものと考え、また他者の内面を不可知のものとする。しかし他方、心の内面性の領域を認め、また他者と関わりこそが人間の思考と言語をより豊かなものとしていえるのである。レヴィナスの主要概念である「顔」は、そもそも言語的なものである。現象する他者を「対話者」と認めた後にことばが交わされるのではない。顔とは表現であり、顔の表明は既に言述である、とレヴィナスは述べる。顔とはそもそも他者との関わり、すなわち言語なのだ。ただし、この言語的關係において他者は私に対して超越的である。なぜなら、表現としてのことばそのものには他者の刻印な

どないし、またことばを私が理解しようとしてもことばを介して他者の内面性が与えられることもないからだ。しかし、それはたんなる否定性ではない。私は与えられたことばを「他者のことば」として迎え入れることができる。つまり、そのことばに関する私の理解以外の「他なる理解」の可能性があるのでないか、と問い直すことができるのだ。

この問い直しを聞くものこそ、他者の「教え」とレヴィナスが呼ぶものである。他者は私の問いかけに対して諾否を語りうる、あるいは別の表現を与えることができる。それこそが他者の教えである。それは思考内容を伝達することではない。そのような伝達は言語においてはそもそも不可能なことであろう。確かに教えは、他者の内面を与えるものではないし、あらゆることばが不可避免的に持つ曖昧さと多義性を最終的に解消するにはいたらない。しかし、単独のコギトには不可能な、より明晰で豊かなことばと思考を開くのではないか。それこそが他者と関わりとしての言語という事態なのではなからうか。

言語としての「顔」という関わりとは、このような他者との知的な社会性のためのものであって、強権的に命令を押しつけるものではない。顔という関係は、殺人という究極の暴力的場面に限られたものではないであろう。ことばの理解における他者の教えに対する敬意、その倫理性こそ、実際の言語活動と思考の営為をより豊かなものにしていくものであり、私と他者との社会性を非暴力的なものにしていくものである。レヴィナスの倫理論とは、突き詰めればこの点を指摘しているものではないだろうか。